

りびんぐらいぶず断章 平成 29(2017)9 月第2号

宗門基本調査に思うこと

はじめに

宗門の施策の実務を俯瞰していると組織全体の統制が取れて居らず、各部門、各プロジェクトの活動がバラバラで統一性がない。

このことは期せずして一ヶ月前に各末寺に送付された『第十回宗門基本調査報告書』をレビューして改めて痛感することになった。

不肖は、奇遇にも調査報告に関連する出来事に遭遇していたので平成二十九年九月一日滋賀教区にて開催の公聴会前日、総合研究所を訪問し報告書の課題を指摘した。

以下はその抜粋である。尚、この一文は、直接的には調査主体の総合研究所長に宛てることになるが、本質的には指示主体の長、具体的課題への取組主体たる頭に宛てたものであることは申すまでもない。

以て、宗門の経営管理層のガバナンスご認識が是正されんことを念願して止まない。

報告書の目的

報告の目的を抜粋すると、

- 一、寺院の運営にご活用下さい (Ref「送付について」by 丘山願海総合研究所長) が織り込まれ、
- 二、宗門の抱える諸問題への適切な対応解決を図る基礎資料を得ること (Ref 第十回宗勢基本調査実施条例第一条第二項) と趣旨が示され、
- 三、住職他の経験や問題点をお聞かせ戴き、宗門全体の知見として検討し、問題解決の糸口を探る為に知恵を出し合い、共に考え、意見を交わして行きたい。今後の伝道教化活動や寺院活動に繋がれば調査員一同望外の喜び (後書き p170-1)、調査結果が活用されていくことを期待 (今後の課題 p18) と調査研究員の声記されていたことが唯一の救いであった。

調査スケジュール

下記に示す表の第一列に 2013 年 11 月以降、2017 年までの四年に亘る調査スケジュールの抜粋を示した。

第二列は、宗門内で同時期、どのような活動が営まれていたかを示し、

第三列は、世の中の動きを示した。

調査スケジュール	宗門内の動き	世の中の動き
1)2013 年 11 月～2015 年 1 月 調査票作成		

2)2015 年 2 月～10 月調査票配布・回収・入力	2015 年 6 月龍谷教学会議 第 51 回大会開催	2015 年 9 月 ISO9001 及び 14001:2015 発行
3)2016 年フィールドワーク 教区説明会		2015 年版移行審査開始 リスクに基づく考え方

調査報告に対する末寺住職の感想

調査報告について何人かのご住職方にお伺いし帰ってきた感想は、報告書に違和感を覚えた。(理由)結果に対して宗派としての取組構想(たとい原案だけでも)が全く示されていない

二、読む気も起こらなかった。調査には高いお金を使っているのだろう。原資は懇志では？

三、一次情報の結果報告だけで、一体、末寺の住職にどう利用せよというのか。

分析結果から何をしなければならないか

寺院収入の結果から云えること

・寺院収入 50 万円未満、50 万以上 100 万円未満 G と 100 万以上 300 万円未満までで末寺の %に昇る。因みに当院は G と G の境目に位置する。収入は全て寺院運営の経費に消えていく。小規模末寺の現実である。

斯かる調査結果を宗門運営に活かすべきご認識をまずは、宗派ご本山にお持ち戴きたかった。末寺にとりご本山大遠忌での懇志拠出から十年に満たない間での総合振興計画費用の拠出は厳しかったからである。

ご本山の法要が終わると末寺でも各々大遠忌を営む。唯単に法要費用だけではなく、本堂等の修復に追われる厳しい時期である。

計画に携わる宗務職員の末寺状況認識欠如が末寺に大きな負担となった現実である。

因みに寺院収入を以て住職家族の経済生活を営めない当院もご多分に漏れず、別的手段で生計を賄っている。この十五年間、中小企業の現実に直接向き合ってきた。中小企業経営者と宗門経営層のご認識には開きがありすぎるとするのが不肖の実感である。

奇しくもアンケート回収のその年、ISOでは2015年版が発行され「リスクに基づく考え方」が世の趨勢になってきた。

この間、宗門として一体何をなさいましたか？とまずお訊ねせねばならない。リスクに基づく取組みができなければ、宗門は、益々世の中から浮き上がってしまうからである。

ISOでは、課題を浮き彫りにした後、トップが戦略的方向性を明確化し、両者をにらみ合わせて、リスクを決定し、そのリスクへの取組を計画し、目標展開を図る。

斯かる世の趨勢に照らせば、調査研究員は、基礎情報の報告に留まらず、課題解決に向

けて取り組むべき趣旨を意見具申をしたかと訊ねても全く積極回答は期待できなかった。

データ分析の後半は社会学部のアカデミックな研究に資するものであり、研究員としては一次分析報告以上の責任は負っていなかったというのが研究員の言い訳であった。

以上はいわば一般論である。以下に述べる指摘は極めて厳しいものになる。それは、責任主体が宗門である課題については、まず宗門として何をして戴きましたか？と問わねばならないからである。

調査報告書の「宗門に期待すること」(図表 9-12, p168-9)がこれに当たる。責任主体が宗門ならばこそ、宗門自らまずその取組みを示して戴かねばならなかったからである

調査報告の「宗門に期待すること」には、
・ 「現代に対応する教学を確立した宗門」27.6%、
・ 「教義をもっと広める宗門」27.4%とあり、「教学への期待が強いことが知られます(p168)」で終わっていたからである。

しかも、斯かる期待は既に第九回調査でも明らかにされていた。

ならば、研究員は、事実報告に終るのではなく「現代に対応する教学を確立すべし」との末寺の要請が強い旨を研究所長報告し、総長に上げ、宗門は、戦略的方向性を打ち出し、傘下の機能を以てして課題解決に取組みしめ、成果報告して戴かねばならなかった。

尊い懇志から少なからぬ原資を投ずるからにはそうして初めて調査報告の意義があったことになるのではなかったか。

一体、宗門として何をして戴きましたか？

奇遇にも「調査票配布・回収・入力」2015 年の六月、たまたま不肖は、龍谷教学会議第 51 回大会で「伝道最前線を支える教学上の試案」と題して研究発表させて戴いていた。

これは、傘下の宗門機能への末寺の住職の時宜を得た参画姿勢とみることはできませんでしたか？

ところが、これに対する当該機能(龍谷教学会議)の対応はどうであったか？

残念ながら、明示の文言による評価基準は提示されず(実は評価基準そのものが文書として存在しない)、評価は客観的証拠によらず、論理的説得力なく、「結果に対する異議や問合せに応じられない」とする高圧的な権威をひけらかす全く時代錯誤のものであった。宗門内の何人に一体いつからそのような特別権限が与えられているかは筆者は寡聞にして知らない。

不肖の手許に事の次第(事実関係)の一部始終は揃っているのですが、必要ならばいつでも総長宛に開示できる状況にある。

ISOで 2015 年版が発行された今日、トップが説明責任を果たし得ないこと自体、内外状況からみて宗門は「社会性」を欠いている。

しかも「社会性」は、昨今勸学寮頭がその重要性を声を大にして訴えていて下さる重要課題だったからである。

因みに、ISO9001 等の 5.1.1 リーダーシップとコミットメントには「トップマネジメントは、品質マネジメントシステムの有効性に説明責任を負う」とある。

調査報告で事の重大性が明るみに出た以上、龍谷教学会議殿には、頬被りせず、今からでもしかるべく是性対応なさるべきが宗門が世の趨勢に一步でも近づくことのできる早道かと思慮されるが如何であろうか。

江戸教学異安心対策論題体系を以てしては、最早、現代社会に向けての伝道エンジンに資するに限界がある以上、「現代に対応する教学の確立」に取り組むべきは、宗門にとっての喫緊の課題だったからである。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌第八回実行委員会三日十九時
正覚寺彼岸会 九月二十二日(金)十四時、十九時半
他院様は、二十日(水)徳勝寺、二十一日(木)種徳寺、二十三日(土)法泉寺、
二十四日(日)徳善寺となります。
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥